



## 『エンジョイ ロータリー』

~Enjoy Rotary~

東京六本木ロータリークラブ会長

# TOKYO ROPPONGI ROTARY CLUB

## WEEKLY REPORT

東京六本木ロータリークラブ



『夢をかたちに』

～Make Dreams Real～  
国際ロータリークラブ会長

発行日 2009年3月16日

No. 29

### 本日のプログラム

平成21年3月16日

卓話 『なぜ木で家を作るのでしょうか』

中村外二工務店 代表

中村 義明 様

#### プロフィール

昭和21年10月

京都で中村外二の次男として出生

昭和43年 3月

立命館大学経営学部卒業

4月

中村外二工務店入店

ニューヨークロックフェラー邸、松下幸之助邸茶室、伊勢神宮茶室、富山県立水墨美術館茶室、サントリー美術館茶室などの国内外の数寄屋造り建築の工事請負・設計・施工

昭和 59 年

株式会社興石設立(和風照明、デンマーク家具製作)

平成 9 年 6 月

中村外二工務店 代表



平成 21 年 3 月 2 日

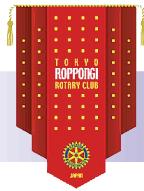
卓話 『決断力を磨く』

将棋棋士 羽生 善治 様

皆さんこんにちは。私は将棋の棋士ですか  
ら普段はひたすら黙って考えているのですが、  
今日はしゃべるという慣れないことを、限ら  
れた時間の中で一生懸命やりたいと思います。  
今日のテーマは決断力です。日常生活の中の  
小さなことでも日々決断の連続、選択の連続  
というのはどの人も変りは無いわけで、その  
中で棋士としてどんなことを考えているかと  
いうことを話したいと思います。

よく何手ぐらい読むんですかって聞かれる  
んですね。これ結構難しい問題で、仮に1万  
手とか10万手が読めたとしても、それだけでは  
先のことが見通せない。将棋っていうのは

大体10の120乗ぐらい可能性があると言われ  
ていて、ですからしらみつぶしに考えていた  
んではいくら時間があってもきりがないわけ  
です。最初どういうことをやってるかという  
と直感を使って考えます。第一印象とか、ぱっ  
と思ったときに思い浮かんだものですね。将  
棋は一つの場面で80通りぐらいの可能性があ  
ると言われるんですけども、その中から2  
つないし3つぐらいの可能性に絞ります。残  
りの可能性は最初の段階で排除してしまいます。  
そこから今度その具体的な読み、Aという選  
択をしたらこうなって、次こうなってという  
具体的な手順を考えていくことになります。



東京六本木ロータリークラブ

TOKYO  
ROPPONGI  
ROTARY CLUB

脳を研究している池谷裕二さんは、直感とひらめきは違うということを言っています。直感というのは自分自身で説明できること、つまりぱっと瞬間に思い浮かんだとき、どうしてそれをやったかということが説明できるのが直感で、何でか分かんないけど、なんか思いついた。こっちは閃き。直感というのは今まで自分が修練してきたものが瞬間に生まれるということなんです。私の好きな言葉の1つに「概念のない直感は盲目である」っていう言葉があるんですけど、そういうきちんとした積み重ね、基礎の部分があって、直感が働くということになります。そこから今度具体的な読み、先ほど話したように2つないし3つの可能性の中から手を考えていく。ただ可能性は指数関数的にどんどん広がっていくので、2手先、3手先となると可能性が多くて全体を把握することが非常に難しいんです。その時に何を使うかというと大局観です。大局を見るっていうのは日常生活の中でもよく使われる言葉ですけれども、今の状況で攻めたらいいのか守ったらいいのか、優勢なのか不利なのかが把握できたとき、その次に何をするべきかが見えやすくなる。直感と読みと大局観の3つが大きな柱になっています。

私は15歳でプロになって今23年目で、その3つを使って考えていることにずっと変りはないんですが、比重が変ってきました。10代の時は読みを中心に考えていました。経験も大局を見る目もないですし、ひたすら順番に読んでいました。少し年数が経つと直感とか大局観を段々重視する形になっています。棋士は、現役で10代から70代の人までいるんですが、見ているとやはり50代、60代の人たちは大局観が優れています。ただ大局観を使って考えるようになると結構それで楽をしてしまって、それに頼りたく



なるというところがあるので、一つ一つ地味に確実に読んでいくということとバランスを取りながらやっているのが現状です。もう随分前、大山15世名人と対局をしたんです。私が17、8歳で大山先生が67、8歳なんですけど、その大山先生の姿を見たとき、あんまり読んでるようには見えなかつたんですね。一枚の絵を鑑賞するかのように見ていて、そこで次何をすればいいかを思っていたんではないかなと思います。経験を積んでいく中で、今の方針をどうしたらいいのかとか、今はどういう状況なのかというところを磨くことが大事だと思います。ただ経験というのは積めば積むほど、逆に考えることが増えるっていうこともある。例えばピンチになってどう脱出しようとか思ったとき、経験があればいろんな選択は見えると思うんですね。でも逆に言うと迷う材料が増えるということもあるんではないか。あともう一つは、これさえやっておけば無難に80点ぐらい取れるというやり方を覚えてしまうことがある。そういうことがあるので、私は、ブレーキとアクセルの関係で言ったらアクセルを少し強めに踏むという気持ちを心がけています。それで丁度いいバランスになると思っています。もう一つ、精神的な強さは経験を積めば積むほど伸びていく、人間の唯一の能力なんではないかなと思います。ほかの能力、例えば記憶とかは個人差もあると思うんですけど、精神的な強さというのはやっぱり経験を積めば積むほど上がって、動じないで対処することができる。ある程度経験を積んでいくと、自然に、これぐらい頑張ればこれぐらいの成果が得られるとか、何ていうんでしょうか、自分の中にある体内時計のようなものが把握できるっていうことがあるのかなと思います。

今は本当に変化が早く、今やっていることが10年後、15年後そのまま役に立つかどうか分からないことが多い。ただその時に、何か一つのことをマスターしたっていう、そこに至るまでのプロセスが、違うことに向かっていくときには、知識ではなく知恵として使えるということがあると思います。今、私は研究するときパ



ソコンで見るんですね。速いものだと1分間で1試合ぐらい見ます。ただ早送りで見ていくとすぐに忘れてしまう。ですから、これは本当に大事だというときは、私は1回全部紙に印刷して木の盤と駒に並べたりしています。やっぱり五感を使うっていうことなんだと思うんです。人間が得ている情報は視覚に頼る部分がすごく多いけれども、それだけではなくて、とにかく五感を沢山作っていくことが大事だと思います。私は年間で60とか70ぐらいの試合を行うんですけども、必ず終わった後に感想戦をやるんです。相手と、例えばここが勝因だったとか、ここはまだ分からないとか、いろんなことを話すわけです。でも、それが終わったら極力忘れるのが大事じゃないかって最近特に思うんですね。若いときは結構それをずっと引きずって覚えていました。最近は自然にどんどん忘れていくんで丁度いい感じなんんですけど、どうして忘れるのが大事かというと、例えば勝てたっていうのがあっても、それがずっと残っていると、その次の試合のときに隙を生じさせるということもあるし、負けたっていうものが残っていると逆に萎縮してしまうので、きれいさっぱり忘れてゼロから次の対局に向かうのが大事じゃないかなって最近は思っています。またアイデアを得るとかひらめきを得るというのは、頭の中を真っ白にするのとすごく関連があるような気がします。本当に何にも考えないでボーっとしていることもあって、傍目にはあまり違いが無いと思うんですけど、沢山のことを知るよりも一回全部頭の中を空っぽにして、その状態で何を思い浮かべるかということも、ひらめきを得るためにすごく大事な要素なんじゃないかなって思っています。

将棋は元々インドで始まったって言われているんですね。最初は、すごろくのようなものだった。日本に入ってきたのが千年から千五百年ぐらい前です。将棋の駒の王将は、最初は玉です。金将、銀将は金銀財宝、桂香は香辛料です。貿易にまつわるもののが駒になっているんですね。日本の将棋は何が特徴かというと、取った駒をもう一回使う、持ち駒再使用というルール。ま

た同じ色の駒でやっているのは日本の将棋だけです。そういうのを比較すると日本の将棋は極めて異質なんですね。どういうところが一番の特徴かっていうと、小さくしていったことです。もともと入ってきた頃の将棋は、もっと広い盤面で駒が70枚とか80枚でやってた。どんどんルールを変えてコンパクトにして現在の形になったのが400年前。コンパクトにしていくっていうのが、私は日本の文化の一番の特徴だって思います。短歌も俳句も能も、茶道もそうだと思います。

将棋には似て非なる場面がすごく多いんですね。例えば歩の位置が1個ずれていたら有利だけど、1個下だったら不利になってしまうというところ。それを見極めるのが、これからすごく大事になってくるんじゃないかなって思うんです。本当に細かいところ、ちょっとしたところの違いが決定的な違いを生み出すっていうのはよくあることで、そういうところを私自身は、棋士として大切にやっていきたいと思います。決断をするとき、すごく迷ったときに、どれだけ細かいところまで目が配れるか。つまりAという道とBという道があって、どっちに進めばいいか分からなくて判断する材料もすごく沢山そろっているときに、より細かいところまでちゃんと自分なりに判断するものを沢山持っていて、動じないで恐れずにやっていけるというのが理想の形です。

ご清聴ありがとうございました。

羽生様から  
メッセージが届きました。

本日は東京六本木ロータリークラブにお招きを頂きありがとうございました。  
皆さんには真剣に聞いて頂いて恐縮でした次第です。  
今後益々のご発展をお祈りいたします。



羽生 善治